

【トピックス】
援農ボランティアによる
都市と農村の交流

- 1…「援農隊に出会って
生き方が広がった」
- 2…「農家が涙ながらに感謝」
- 3…「最初は、観光主体で
作業は片手間だと思っていた」
- 4…「本物の農業を体験したい」
- 5…「1か月かかる作業が
あっという間に終了」
- 6…「都市生活者と生産農家の
橋渡しがやりがい」
- 7…「遠い親戚ができたみたい」

つなぐ

～ 緑をつなぎ、笑顔をつなぎ、未来へつなぐ。～

平成26年度の都市農村交流事業
①農村との交流や農作業をボランティアで支援する「快汗！猫の手援農隊」を全国21か所568名で実施した他、
②食と農をテーマにした交流企画を全国2か所96名。③田舎暮らし・島

（一社）全国農協観光協会では、「高齢化・担い手不足の課題を抱える農山漁村」と「食の安全や田舎暮らしに関心のある都市住民」とをつなぐ、交流に関するさまざまな事業を実施しています。
今号の『つなぐ』では、当協会が昭和42年の設立当初から公益事業として継続している「都市農村交流」の実践について、特に援農ボランティアを取り巻く「(1)都市住民」・「(2)受入農家」・「(3)JA事務局」の三者にスポットをあてて、交流の現場の声を集めましたので、JAグループにおける「食と農の理解促進」や「地域との関係強化」に向けた事業活動に役立てて頂ければ幸いです。

とも魅力で、農家のおばあちゃんに煮物の作り方を教わったり、根曲り竹の味噌汁など郷土料理の話ができたりしたことも楽しかったです。
援農隊参加後は、りんごは農家さんより箱買いをしていて、会社で配るとすごく好評。みんなから注文をとっているほどです。会社の人はお金を払ってお手伝いすることを不思議がっていましたが、収穫したりんごを食べれば納得してくれます。
りんごの収穫時期や作業の多さなども都会にいたら分からなかったことです。最初のうちは本当に役に立っているのかが分からなかったし、首も痛くなるし、斜面での脚立作業は緊張もしたけど、普段できないことをしたり、仲間の援農隊に会えたり、農家さんに会えたりするのがとても楽しみです。また来てねと言ってくれる喜び、贈り物をする間柄にもなり、遠い親戚ができたみたいです。

暮らしを目的とした滞在型企画を11か所118名。そして、本格的な援農や暮らしの交流ではなく、気軽に農業体験が楽しめる、④短期交流企画を75企画2,356名。年間総数で3,138名の都市住民の方々に農山漁村との交流に参加して頂きました。
中でも「快汗！猫の手援農隊」は、平成11年の取組み開始以降、累計5,300名以上の都市住民の方々に参加して頂き、手作業による中間作業や植付け、収穫、片付け、といった手間のかかる作業を手伝って頂いています。
自費で現地まで駆けつけてもらいう、この援農ボランティアでは、自然の中で農作業に没頭でき、社会貢献を実感できる他、交流会を通じて農家や地域の方々とふれあい、人と人との交流や地域の食と文化に触れることが魅力となり、一般の観光旅行や体験ツアーでは得がたい自己実現や、生きがいに繋がる価値が得られるとの評価から、参加者の増加につながっています。



摘み取った花を堆肥にするため、田んぼに撒く様子



にんにく援農事務局
(JA越後さんとう営農部 青柳課長)

JA 6 都市生活者と生産農家の橋渡しがやりがい

米 特化から園芸作物の産地化を目指す中、農家を儲けさせるための販路開拓に加え、労力の確保が重要でした。これまでの米の産地間交流にはな

この援農隊では30人で、あつという間に植付けを終えてしまってます。最近では欠かさない存在となっています。最近では花火見物などで個人的に援農隊のメンバーが訪ねて来てくれて一緒にバーベキューをやったり、援農の前後に電話を頂いたりとお話が広がっています。今後も援農を通じて都市と農村の交流を続けていきたいと思います。



近辺の農家の息子でもやらないようなことをわざわざ遠路からお金を出して来てくれることが信じられなかったのですが、この規模を一人でやってきた頃は10月から植付けを始め11月初旬までかかった作業が、



猫の手援農隊
(東京都大田区の小塚さん)

ボランティア 7 遠い親戚ができたみたい

平 日が休みの仕事をしていたため、他の方との接点がなく、何かしたいけど何がいいのだろうと考えていた時に、過去の新聞記事でりんご摘果隊の募集があったことを思い出して、あまり深く考えずに申し込んでみました。実際に行った農家は、ご夫婦、小学生、おばあちゃんの農家で、ご主人は寡黙な方でしたが話すとお父さんに似ていたので親しみやすかったのが第一印象でした。援農隊では、現地の郷土料理が食べられるこ

い直接の農作業を通してふれあう援農隊の意義は大きく、都市生活者と生産農家の橋渡しは、やりがいのある仕事です。平成13年の合併当初は業務内容が違うことから園芸で仕掛けにくい状況でもありましたが、平成18年に営農センター長になってからは現場感覚で行政や全農、部会等の協力をまとめることができ、熱い思いが実りました。また、援農受入れの際にはJA女性部の協力で、にんにく料理のおもてなしもあり、交流会やホテル観賞とも併せ、参加者には喜んで頂いていると思います。

「快汗!猫の手援農隊」受け入れの効果と課題

1. 援農隊を受け入れた`きっかけ、
 - ①JA・行政・全国農協観光協会からの紹介
 - ②農家・生産者及び地域からの要望
 - ③都市住民のニーズや要望
2. 受け入れ後の感想、効果
 - ①農作業が早く終わり助かった
 - ②今後も耕作していく意欲がわいた
 - ③交流ができて生活者ニーズが直接聞けた
3. 援農隊受け入れの課題
 - ①参加者の送迎や交流会の設営に人手がかかる
 - ②職員の対応やコスト負担の問題
 - ③圃場でのトイレや雨天対策
 - ④受け入れ農家の選定と割り当て
4. 今後について
 - ①継続して受け入れたい
 - ②他の作物や作業工程もお願いしたい
 - ③交流の規模を拡大したい

都市農村交流に関する詳しい情報はこちら。
インターネット >> [猫の手援農隊](#)

最新情報・お得情報のメールマガジン登録はこちら。

ホームページ <http://www.znk.or.jp/>

フェイスブック <https://www.facebook.com/fureai.n>

メルマガ <http://www.znk.or.jp/club/#mailmg>

本件に関するお問い合わせは (一社)全国農協観光協会 地域振興推進部
☎ 03-5297-0323

つなぐ 2015年8月発行 No.06

発行／一般社団法人 全国農協観光協会 発行人／菅藤 豪 編集人／木本 和男
〒101-0021 東京都千代田区外神田1-16-18 ツアールビル4F ☎03-5297-0321 ☎03-5297-0322

美しい日本の農村と安全で質の高い日本の農業を守るために

(一社)全国農協観光協会「快汗!猫の手援農隊」による地域活性化と農業の理解促進に向けた「ボランティア」「受入農家」「JA事務局」の交流体験談をお届けします。

ボランティア

1 援農隊に出会って 生き方が広がった



猫の手援農隊 (神奈川県相模原市の佐藤さん)

最初に参加したのは12〜13年前にNHKラジオで

ボランティアの募集広報を聞いたのがきっかけで農業は経験がなかったが好奇心がありすぐに応募しました。自費で参加することに抵抗はありませんでしたが、農家の大事な畑に入っているのか戸惑いながら一人で参加し、今では63回の参加経験となっています。どこに行っても懐かしさを感じるし、自然に癒されるのが嬉しいですね。また、無心で農作業に集中することがストレス解消にもつながっています。

援農隊に参加してからは、農家の方と親しくなったこともあり、農産物の産地表示を見るようになり、また、台風のニュースを聞くとき心配になるし、大変な手間をかけている分、少しでも高く売られてほしいと思うようになりました。

援農の経験を積むと、ボランティアだからこそ責任感を強く持つべきだと

と思うようにもなりました。農家に認めてもらって、まかせてもらえるだけの意識を持たないといけない。そして、私たち援農のベテランたちが、若い参加者に伝えたいことは農作業を楽しむ、ボランティア同士や地域の人たちとの交流を通じていろいろな気付きを得てほしいことです。若い人たちがリフレッシュの仕方の一つとしても体験してほしいです。

今後はもともと地域の多くの方と交流したり、その土地の獅子舞とか伝統芸能、郷土料理を学んだりしながら援農活動を続けたいと思っています。援農隊に出会って、生き方が広がったことに感謝しています。

2 農家が涙ながらに感謝



チューリップ球根生産組合長 (富山県高岡市 高畑さん)

昨年(平成26年)JA富山中央会およびJA高岡と全国農協観光協会より

援農隊の話聞いたのが最初でした。富山のチューリップは砺波市が有名ですが、切り花に関しては高岡が

「みかん収穫」など援農ボランティアの経験も多く、いつも夫婦で参加しています。一番初めに援農ボランティアの存在を知ったのは10年前頃に見た新聞記事でした。当時は子供たちも学生であり、忙しかったため、参加することはできなかったが、近年ようやく参加すること

トップシエアであり、花の持つ力や癒し効果に興味を持ってもらえたらと思います。受入れを決めました。球根組合の中には病気対策など専門知識や技術がないと無理ではないかといった意見も多かったのですが、高齢化や担い手不足、雇用のコスト問題も深刻で、抵抗はあったものの背に腹は代えられない状況でもありました。

援農隊を受入れて感じたことは、経験の浅い援農隊の方とベテランの方との集中力の違いです。農家にはそのことも理解の上で受入れてもらうことが必要。また、ボランティア同士でも交流し、農作業への思いを共有してもらおうとさらに広がっていくと思います。

今年受け入れた農家では「来てくれてありがとう。手伝ってくれてありがとう」と拝まれ、涙ぐみながら感謝している人もいました。

猫の手援農隊のやり方は、理にかなっていると思います。若い世代や新規就農者、夢はあるけどやり方わからない人たちが、生産者たちに作業を教わり、コミュニケーションの中で成長し、一体感が生まれることで達成感も増大すると思います。まさに教

ができるようになりました。普通の果物狩りなどの体験旅行も何度か参加したものの、売り物に触れる本物の農業に触れたい、普段食べる食の生産現場を直接見て、そして体感したいの思いから、週末や仕事の合間を調整して援農ボランティアに参加しています。

奥様は、美味しい食べ物に興味があり援農先の農産物は通販などで継続して購入していると言います。また、農家との交流を通じて直接、漬物や地元料理の作り方を教えてもらうことも大きな楽しみとなっています。何より、都市部で生まれ育ったため、田舎の青空の下、美味しい空気を吸って農作業に集中することで、リフレッシュになることから、今後も参加を続け

育であり、食育、花育と言えます。チューリップの球根生産には花摘みの他、球根掘り出し、除根、水洗い選別、出荷選別などの作業があり、それぞれの時期に来てもらえると、農家は専門知識が必要な作業に集中して作業を進めることができます。作業説明の際に「この花であれば買いたいと思う花だけを残してください」と言うことで、消費者ニーズを肌で感じることもできます。

3 最初は、観光主体で作業は片手間だと思っていた



チューリップ援農事務局 (JA高岡組織広報課 長江課長)

全国農協観光協会の

援農隊の活動を初めて聞いた時、観光が主体で片手間に体験作業をする程度の企画だと勘違いしていましたが、一本一本中腰で摘み取る作業を真剣に、そして集中して行い、通常1週間かかる作業が3日で完了した時には、援農隊に対

たいと思っています。また、日本の農業については、こんないいものを手間暇かけて作っているの、もって国内に向けた宣伝や海外への輸出に力をいれたらどうかとも感じています。

5 一か月かかる作業があつという間に終了



にんにく生産者 (新潟県長岡市 丸山さん)

JA(越後さんとう)

から稲以外の作物で産地化を目指しているため、指しているため、稲の農閑期対策として、田植え後の収穫、稲刈り後の植付けといった調整が可能だったことから、にんにくを始めるところが収益化や産地化のためには規模の確保が絶対条件であり、設備や労力の課題が大きかった。当初は3本の畝から始め、補助金も活用しながら12アール程度に拡大してきたところ、平成22年に新潟市のグリーンツーリズムセンターとJAから都市住民の交流受入れの話があり、「猫の手援農隊」の受入れに繋がりました。最初はこの

ボランティア

4 本物の農業を体験したい



猫の手援農隊 (神奈川県横浜市平戸さん(夫婦))

4年前から参加している横浜

市在住の平戸さんご夫婦。これまでに「にんにく収穫・植付け」「りんご摘果」、

※当協会の援農ボランティア参加者アンケートより抜粋。有効回答数1,194件

